



連載

常陸時代の佐竹氏
— 500年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第24回】

義宣、秋田へ国替

1 「車丹波守憤恨の地」の石碑

茨城県水戸市。JR常磐線水戸駅北口前の国道51号を同市下市方面へ車で向かう。左手高台の茨城県立水戸第一高等学校下を通り過ぎ、常磐線踏切を越える。「そのまま城南3丁目」交差点を直進。下市方面から延びる県道180号と合流。右手奥の吉田神社を過ぎ、そのまま吉田台地の上り坂を進む。間もなく進行右側に清巖寺入口がある。そこを通り過ぎて最初の信号機なしの交差点を左折。元吉田町の住宅街に入っていく。

道沿い住宅が立ち並ぶ狭い道である。そのまま道なりに進むと、緩い左カーブとなる。その進行左側の道沿いに奥行きのある細長い空き地が現れる。周りは住宅街。空き地の正面右側に白い石碑が立っている。表面に「車丹波守憤恨の地」と刻まれ、側面に「平成七年三月設置 水戸市教育委員会」とある。空き地奥に小さな祠がみえる。近づいて覗くと簡素な祭壇と紙垂が設置されている。

石碑の場所に戻って側面に刻まれた碑文を読む。以下のように書かれている。「慶長7年（1602）7月佐竹氏の旧臣車丹波守斯忠（くるまつただ＝筆者）らが佐竹氏の秋田威移封に抗して水戸城奪回をはかって捕らえられた、とこの地に伝えられる。佐竹氏の残存勢力を圧倒した大きな事件であった」と。佐竹義宣の秋田国替に伴い居城・水戸城は徳川氏側に接収された。事件は其の直後に起きたようだ。

2 西軍敗北、石田三成ら処刑

石田三成の西軍と徳川家康率いる東軍は慶長5年（1600）9月、美濃国不破郡関ヶ原（岐阜県不破郡関ヶ原町）で激突した。決戦は1日で終わった。『佐竹家譜』は慶長5年9月15日条で「関原合戦。関西の諸将尽く敗軍」と記す。さらに同月23日条で「毛利輝元大阪退城」と書き、同月27日条に「内府大阪西の丸に移り住す」とある。

内府とは徳川家康を指す。

さらに慶長5年10月朔日条で「石田三成、小西行長、安国寺恵瓊等伏誅」とある。「伏誅」は悪事を働いたとして処刑されたとの意味である。同月15日条には「黄門（徳川秀忠＝筆者）、義宣に（宛てた）賜書に曰く如承意天下平均相済」とある。あなた（義宣）がいわれるように天下がなだらかになったと解釈できる。

義宣はこの間、水戸城（水戸市）に在城、一步も動かなかった。「天下分け目の戦い」はアツという間に終わった。この時、佐竹氏が置かれた状況を『水戸市史・上巻』は次のように書く。「しかし、佐竹家中では、今後の徳川氏の出方を憂慮して、重苦しい気分に含まれたに違いない」と。義宣は上杉討伐に際し家康からの人質要請を断っている。石田三成らが処刑された今、家康が次にどう動くか。そこが気がかりだったに違いない。

3 島津氏を残し、西軍大名の処分終わる

危惧をいだきながらも慶長5年は過ぎた。『佐竹家譜』の慶長6年（1601）4月15日条に「義重上洛。伏見登口營。内府に見ゆ（以上古老の聞書きに出づ）」とある。これが事実とすれば、義宣の父義重は居城の太田城（茨城県常陸太田市）から伏見（京都府京都市伏見区）まで行き、家康に拝謁したことになる。佐竹氏が置かれていた立場を象徴するような出来事といえる。（注：□は原文のまま表記＝筆者）

家康は慶長6年11月、江戸へ凱旋した。この時、義宣は「前月から江戸へ出て、家康の帰着を出迎えた」（『水戸市史・上巻』＝以下上巻は省略）。さらに家臣に送った手紙で「江戸では変わったことはない」（『同』）と述べている。義重・義宣親子は気がかりな点を確かめようと、慎重に対応している姿がうかがえる。その結果、この時点で佐竹氏に対する家康の態度に特段の変化はなかった。

『水戸市史』は語る。「西軍の諸大名は大部分が改易となり、上杉氏も8月、会津120万石から米沢30万石に減封移転が決定。毛利氏も8箇国から周防・長門2国だけを残して削封処分。島津氏だけが処分未定で徳川方と一進一退の交渉をつづけ、削封を免れようと努力中であった」と。人質問題は上杉氏討伐に絡んだこと。何かがあるとすれば上杉氏処分と連動して同時期にあるはず。しかし、何もない。

4 上洛中の義宣に突然の国替 言い渡し

義宣は安堵の思いで慶長7年(1602)の正月を迎えたのではない。義宣は「上洛」を決断した。上洛について『佐竹遷封記』(『鉾田町史研究・七瀬11』収録、平成13年鉾田町発行)は以下のように記す。「鉄砲百挺、弓百張、槍百筋ヲ持セ、騎馬ノ士百五十騎ヲ引卒シ、四月十日、水戸城ヲ発足アリ」とある。たいそうな供ぞろえである。義宣はどんな思いで上洛したのであるか。

家康らに謁見後、義宣は京都・伏見の佐竹屋敷に留まった。『佐竹家譜』は5月8日条で以下のように記す。「内府榊原泰政(式部太夫)、花房道兼(助兵衛)をして命を下して曰く、義宣、葦名盛重、岩城貞隆、相馬義胤、所領常州奥州野州等の地尽く是を没収せられ、義宣に羽州に於て替地賜べしと」。娘が岩城貞隆の正室となっていた相馬義胤を含め義宣らに領地没収の命が下った。

しかも、「替地」は「羽州」とされた義宣のみだった。葦名・岩城・相馬氏に替地は示されなかった。同年7月27日、義宣に「出羽国之内秋田・仙北両所進置候」とする家康の花押が入った判物が与えられた。『水戸市史』は「国替申し渡以来、80日も及ぶ(義宣の)伏見滞在」は、「常陸の城地の没収、家臣団の移転が支障なく完了するまで、義宣を伏見に人質同様に引き留めておいたため」と指摘する。

5 寝耳に水、国元の不安と動揺

突然の国替は急使によって国元へ知らされた。国替を知らされた家臣たちの驚きはいかばかりであったことか。同年6月、佐竹・葦名・岩城・相馬氏の城が次々と接收された。水戸城は接收後、「松平周防守康重」が在番で配置された。佐竹氏

は家祖・源義光以来、約500年にわたって常陸国に住み、根を張ってきた。その地を離れざるを得ない。家臣たちにとって事態は想像を絶するものだったのだろう。

その最中、佐竹氏家臣による水戸城奪回事件が起きた。『水戸市史』は[車丹波一揆]の項目立てをして、関係人物と事件の真相を考証している。それに基づくと、「一揆の首謀者」として「車丹波、大久保兵蔵、馬場和泉」の3人を記している。そのうえで「陰謀の計画があったとしても、それは必ずしも明白なものではなかったから捕縛から処刑まで3ヶ月もかかったのであろう」とみている。

ただ、こうも指摘する。「徳川方ではかねて佐竹遺臣や地侍衆の不平と反抗を警戒していたから、わずかな嫌疑をもって厳しく穿察し極刑に処したのであろう」と。そのうえで「国替当時、常陸国内で充満した不安と動揺と不穏な空気がこの事件に発火したものであるから、その意義はやはり大きい」と『同市史』はみる。国替の理由も示されず、故国を去れという命令は家臣たちにとって理不尽と映ったのであろうか。

なお、相馬氏は慶長9年(1604)旧領を取り戻し、岩城氏は元和2年(1616)、信濃国高井郡(長野県高井郡)に信州中村藩(川中島藩)1万石で再興された。

歴史ジャーナリスト 茨城県郷土文化研究会会長 富山 章一



住宅地に囲まれた一角に立つ「車丹波守憤恨の地」の石碑。後方には小さな祠が鎮座している＝水戸市元吉田町